慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Mauriac : Conscience, instinct divinについて
Sub Title	Au sujet de Conscience, instinct divin
Author	高山, 鉄男(Takayama, Tetsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.137(220)- 149(208)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Mauriac : *Conscience, instinct divin* について

高　山　鉄　男

Mauriac : *Thérèse Desqueyroux* の成立を研究する際，対象となるテキストは計4点である。第1は未定稿 *Conscience, instinct divin* であり，このテキストは，*Thérèse Desqueyroux* 刊行の直後，1927年3月に *La Revue nouvelle* 誌に発表され，同年10月，Émile-Paul 書店より単行本として刊行された。第2は，*Thérèse Desqueyroux* の草稿 I（manuscrit I）と呼び得るもの，第3は草稿II（manuscrit II）と呼び得るもので，これら二つの草稿は，いずれもテキサス大学の Humanities Research Center に保存されている。第4は言うまでもなく *Thérèse Desqueyroux* の最終テキストで，1926年11月15日より1927年1月1日まで4回にわたって *Revue de Paris* 誌に連載され，1927年2月 Grasset 書店から刊行された。*Thérèse Desqueyroux* の成立を研究するには，これら4点の資料のそれぞれについて検討を加えねばならない。本稿では，これらのテキストのうち，もっとも早い時期に書かれた未定稿 *Conscience, instinct divin* について，その執筆の時期，主題などについて考察したい。

モーリヤックは，40代の初期が，生涯の困難な時期であったことをくり返し述べている。それは〈青春の終り〉の時であるとともに，〈老年の始まり〉の時期であって，この年代に特有の〈不安〉troubles をともなった[1]。ところで1825年，モーリヤックはまさにその40代にさしかかろうとしていた。1927年に深刻な事態を迎えるはずの宗教的危機を，この頃のモーリヤックはすでに経験しつつあったのだろうか。もっとも深い意味で精神的な

このような危機に関して，明確な始まりと終りの年代を定めることはむろん不可能である。しかし，1923年刊の *Le Fleuve de feu* も，1925年3月刊の *Le Désert de l'amour* も，ともに満たされざる欲望の不安と，それゆえの苦悩を表現していることを確認しなければならない。このような不安，このような苦悩は，作者が，この頃，久しく願っていた社会的名声，世間的成功をようやく得つつあっただけに，いっそう際立って見える。1922年の *Le Baiser au lépreux* 刊行以来，モーリヤックの名は，広く一般に知られるようになり，1925年，アカデミー・フランセーズ小説大賞の受賞は，モーリヤックの文壇的地位を確実なものにした。同時にモーリヤックは，*Le Désert de l'amour* によって独自の小説技法を確立し，さらに *Thérèse Desqueyroux* は，モーリヤックが小説家として円熟の境地に達したことを証明することになろう。友人のシャルル・デュ・ボスは，〈日記〉の1925年11月26日の項で，モーリヤックは油がのって来たから活用しない手はない，とやや露骨な口調で記し，当時，編集の任にあたっていた *Écrits intimes* 叢書への寄稿をモーリヤックにも頼むつもりだと述べている[2)]。シャルル・デュ・ボスが日記にこう記してから間もない頃の1925年11月28日，モーリヤックは，兄のピエール・モーリヤックあてに手紙を書き，カナビー事件に関する資料の送付を謝している。よく知られているように，カナビー夫人が，夫にたいする毒殺未遂の罪を問われて，ボルドー市で裁判にかかったのは1906年のことで，この裁判をモーリヤック自身も傍聴している。このカナビー事件をもとにして小説を書くことを思いたったモーリヤックは，毒殺に関する医学的資料を入手したいと考えて，ボルドー大学医学部教授の兄ピエールに依頼し，資料入手ののち，礼状を書いたのが，上記1925年11月28日付書簡である。兄ピエールあて書簡でのカナビー事件への言及は，*Thérèse Desqueyroux* の著想に関する最初のあらわれであって，未定稿 *Conscience, instinct divin* が執筆されたのも，ほぼこの頃であったろうと推測できる。このテキストの草稿は，方眼罫のいわゆる cahier écolier に12枚にわたって書かれたもので，ジャック・ドゥーセ文芸文庫に所蔵されている[3)]。この草稿と，*La Revue nouvelle* 誌に発表されたテキストを較べる

と，若干の興味深い相違が発見されるが，これについては後述しよう。

Conscience, instinct divin が書かれたのは，このようなわけで，1825年11月よりあまり遠くない頃と推定されるのであるが，さらに明確に執筆の時期を特定することはできないであろうか。草稿の第12枚目（fol. 12）には，モーリヤックの筆跡で次のようなメモが記されている。

70	Tanganyika	500
30	Shell	750
750	750	
30	25	
22500	375	
	150	
	18750	

Tanganyika は鉱山会社，Shell は言うまでもなく石油会社の名前である。この覚え書は，当時モーリヤックが所有していて売却を意図したか，もしくは所有していなくて購入を意図した株式に関するものと考えられる。左側の70及び30という数字は，株式の数量，右側の500及び750という数字は，株式の時価であろう。また下に見られる計算は，Shell 株を，30株，もしくは25株売却（もしくは購入）した場合の総額の計算と思われる。そこで筆者は，フィガロ紙の株式欄によって，1925年及び1926年の株式相場を調査した。その結果判明したのは，1925年及び1926年の両年を通じて，Tanganyica 及び Shell の株式については，500フラン，及び750フランという相場がいずれもきわめて高い水準を示すものであって，その時期は1925年11月11日（金）以後の数日間に限られるという事実である。具体的に言えば，Tanganyika 株が，500フランを上まわったのは，1925年12月11日（金）のみ，Shell 株が750フランを越えたのは同年の12月15日（火）のみである。

その前後では，1925年及び1926年を通じ，どちらの株式もかなり低い水準にとどまった。したがって，モーリヤックが，このメモを書いたのは，1925年12月11日以降，ほぼ一週間以内の時期以外には考えられず，*Conscience, instinct divin* の草稿が書かれたのも，ほぼこの頃と想定して間違いない。

さて，次に *Conscience, instinct divin* の主題を検討しなければならないが，その前に，この未定稿において採用された小説形式に注目したい。すなわちこのテキストの内容は，神父にたいしてなされた告解であり，これは告解の形をかりた小説である。最終稿の *Thérèse Desqueyroux* とはことなり，*Conscience, instinct divin* の女主人公はカトリック信者で，なんらかの良心の呵責に苦しめられている。*Conscience, instinct divin* という題名はルソーに借りたものであるが[4]，この題名じたい，このテキストが全体として女主人公による自己自身の良心の糾明，もしくは魂の再検討をもって内容としていることを示している。草稿 I 以降では，告白は神父にではなく，夫ベルナールに向けてなされることになる。と言うよりも，実際にはなされることがなかった夫への告白の準備こそ，テレーズのあの長い内的独白の内容なのである。こうして，草稿 I 以降，女主人公の告白は，宗教的性格を失い，女主人公は非キリスト教的人間として描かれることになる。とはいうものの，最初の未定稿 *Conscience, instinct divin* から，最終稿 *Thérèse Desqueyroux* にいたるまで，この作品が女主人公による自らの魂の探索の物語としてとどまったことは注意されなければならない。テレーズの内的独白は，じつは神父にたいしてなされた告解の変容した形だったのである。告解は，罪の意識を想定する。ところで，（これはすでに *Conscience, instinct divin* の主題にかかわることになるが）この段階ではまだ名前をもっていない女主人公は，キリスト教的な意味で罪人であるにとどまらず，法律上の意味でも犯罪者であるとされている。

> Je ne connais pas mes péchés. Déjà j'ouvrais la bouche, j'allais vous déclarer que je suis une criminelle et que mon crime est de ceux qui relèvent de la justice des hommes, mais tous les mots sont

restés dans ma bouche : c'est que je ne suis pas sûre d'avoir voulu commettre cet assassinat, et pas même sûre de l'avoir commis. D'ailleurs celui auquel je pense est vivant. Par contre il est une mort où certes je ne suis pour rien ; saurai-je jamais pourquoi j'en porte le poids qui m'étouffe ? [5)]

この一節によって，女主人公が殺人を犯そうとしたこと，しかし対象たる人物は生存していて，犯罪が未遂に終ったことがわかる。夫に対する殺人未遂，すなわち *Thérèse Desqueyroux* の物語の基本的な枠組が，すでに *Conscience, instinct divin* にはっきりと現われている。のみならず，草稿 I，草稿 II，最終稿というふうに，段階を追ってしだいに展開されて行く女主人公の自己省察が，すでに *Conscience, instinct divin* の主題をなしていること，女友達 Raymonde（草稿 I 以降 Anne となる）とともに過ごした夏の休暇の思い出，夫の人物描写など，*Thérèse Desqueyroux* のさまざまの物語的要素が，すでに *Conscience, instinct divin* に現われていることなどを考えると，1925年12月，*Conscience, instinct divin* 執筆の段階において，*Thérèse Desqueyroux* の物語の大まかな筋立てはすでに作者の念頭にあったのではないかと思われる。ただし，これらの物語的要素のそれぞれに関する記述の多くは，かなり曖昧で，その後に書かれたテキストを参照することなしには，正確な意味を把握しがたい。たとえば，いま引用した一節の冒頭で，女主人公が，〈Je ne connais pas mes péchés.〉と言うとき，この言葉の意味するところについて，読者はとまどうはずである。けれども，最終稿のテキストは，その意味を明らかにしている。なぜならば，最終稿で，この箇所は次のように変えられているからである。《Moi, je ne connais pas mes crimes. Je n'ai pas voulu celui dont on me charge. Je ne ne sais pas ce que j'ai voulu.》[6)]最終稿において，この箇所は，夫にたいするテレーズの犯罪がいわば無意識に行われたこと，すくなくとも予謀されたものでないことを意味している。

他方，引用箇所の終りで暗示されているもう一つの犯罪への暗示は，草

稿 I 以降で消滅する。*Conscience, instinct divin* においてのみ，女主人公に二つの犯罪が帰せられ，しかも二つの罪はいわば対立的なものとしてとらえられている。すなわち夫にたいして行われた第一の犯罪に関して，女主人公は《Je ne connais pas mes péchés.》と言って責任を回避する一方，第二の罪にたいしては，《(……) pourquoi j'en porte le poids qui m'étouffe ?》と言って，罪の意識の重みに耐えないことを告白している。この第二の罪とは，女友達の Anne を死に至らしめた罪のことであるが，これについては拙論〈Thérèse Desqueyroux の草稿 I について〉[7]を参照していただければ幸いである。

このように，*Conscience, instinct divin* において，物語的要素の多くは，当然のことながら充分に展開されておらず，したがって記述も曖昧であって，意味を把握するためにはその後のテキストの変化を参照しなければならないのであるが，ある一つの物語的要素だけは，*Conscience, instinct divin* において明確に呈示されている。というよりもむしろ，この未定稿においてこそ，他のそれ以後のテキストにおけるよりもむしろはっきりと表現されている。その物語的要素とは，夫との性的関係について女主人公がいだく嫌悪感である。*Conscience, instinct divin* の女主人公にとって，夫との肉体的接触はいとうべきものであり，夫と快楽をともにすることなどとうてい不可能なのである。

> Le délire amoureux n'enchante que ceux qu'll embrasse enchainés, confondus, que ceux qu'il ne sépare point. Pour moi, j'ai toujours vu mon complice s'enfoncer dans son plaisir et moi, je demeurais sur le rivage, muette, glacée. Je faisais la morte comme si ce fou, cet épileptique, au moindre geste, eût risqué de m'étrangler. Le plus souvent au milieu de sa sale joie il s'aperçoit soudain qu'il est seul ; l'interminable acharnement s'interrompt, il revient sur ses pas et me retrouve comme sur le sable où j'eusse été rejetée, les dents serrées, froide, cadavre...[8]

細部にかかわる若干の変更をべつにすれば，この一節はおおむねそのまま最終稿にまで残ることになる。*Thérèse Desqueyroux* は，未定稿 *Conscience, instinct divin* から最終稿にいたるまで，物語的要素の一部に夫と妻との性的不一致を含むものだと言える。それだけではない。*Conscience, instinct divin* の女主人公にとって，夫が行う〈闇の忍耐強く際限もない工夫〉(les patientes et indéfinies inventions de l'ombre) は，まったくの苦痛以外のものではなく，〈献身的な心づかいによって〉(à force de soins dévotieux)，耐えがたい苦痛を忘れさせるには，〈昼間の時間はあまりに短かった〉(les journées étaient trop courtes) と思われるのだ[9]。女主人公は，夫にたいする殺人未遂は，一種の報復行為であったとすら語る。《Ah! Si je n'ai fait que lui rendre ce qu'il m'avait donné, ce jour où cédant tour à tour à la tentation de l'anéantir et du désir de le sauver...[10]》この一節は，女主人公の罪を正当化するとともに，犯罪の真の動機を明らかにするものであるが，草稿 I 以降では消えることになる。

妻が夫にたいして覚えるこのような極度の嫌悪感はなにゆえのものだろうか。こうした疑問は，当然読者の念頭に浮かぶものであって，女主人公が夫の若々しい男らしさや，〈美しい，真面目で直截なまなざし〉(ce beau regard grave et direct) を〈まったく感じないわけではなかった〉[11]と，されているとすればなおのことであろう。このような疑問は，女主人公が，〈夫は私が愛する，もしくは愛するであろう唯一の男性であり〉〈他のすべての男性よりも好ましい[12]〉と断言するとき，ほとんど謎めいたものに思われて来る。*Thérèse Desqueyroux* の最終稿において，夫の Bernard は，妻の感情を理解し得ない俗物として描かれているが，*Conscience, instinct divin* にそのような記述はない。夫の俗物性は，草稿 I 以後でしだいに強調されて行くのであって，*Thérèse Desqueyroux* の著想の当初にあっては，夫はむしろ肯定的な人物として考えられていたのである。

ならば，*Conscience, instinct divin* の女主人公は，修道院附属の寄宿学校であまりにも清純な女性として育てられた結果，男性にたいして嫌悪感

をいだくにいたったのだろうか。そうは考えられない。なぜなら，まさにその寄宿学校において，自分は〈情念に満ちた天使〉(un ange plein de passion) であったと告白されているからである。男性にたいする嫌悪は，おそらく彼女の心底にひそむ，なんらかの異常の現われであるにちがいない。ありていに言ってしまえば，その原因は，女主人公の同性愛的傾向に求められる。そのような傾向こそ，夫との接触を嫌悪せしめ，さらには夫にたいする殺人未遂にまで女主人公をかりたてたものである。〈情念に満ちた天使〉(un ange plein de passion) という重要な表現を含む一節の全部を引用する。

> Je vous ai dit que dans ce temps-là j'étais candide. Je l'étais : mais imaginez un ange plein de passion ; voilà ce que j'étais, mon père. Je souffrais, je faisais souffrir, je jouissais du mal que je faisais et de celui qui me venait de mes amies : pure souffrance qu'aucun remords n'altérait, caresses qui n'étaient point criminelles.[13)]

この一節は，寄宿学校時代における主人公とその女友達の生活を回想したもので，これによって女主人公の性的な傾向は明らかであると思われるが，〈Je souffrais, je faisais souffrir, je jouissais du mal que je faisais et de celui qui me venait de mes amies (...)〉という曖昧な記述に関して述べれば，この箇所の意味は，Jacques de Lacretelle の小説 *La Bonifas* を参照することで明らかになる。

1927年3月30日，モーリヤックは，Henri de Régnier に手紙を書き，Régnier の *Thérèse Desqueyroux* 評について謝辞を述べている。

> Je suis très touché de la belle chronique dont vous avez honoré cette triste Thérèse. Elle reçoit d'ailleurs un accueil que je n'aurais osé espérer pour une personne si méchante. Je crois que j'ai trop

insisté sur *l'ennui* dont elle souffre et pas assez sur son vrai drame qui est la solitude sexuelle. C'est au fond une Bonifas qui s'ignore.[14)]

ここでモーリヤックは，テレーズの悲劇とは，なによりもその solitude sexuelle にあると明白に述べている。またテレーズは，une Bonifas qui s'ignore であるとも述べている。Bonifas とは，Jacques de Lacretelle の小説 *La Bonifas* の女主人公であり，Lacretelle のこの小説が刊行されたのは，まさに1925年，*Thérèse Desqueyroux* 著想の年だったのである。モーリヤックが *La Bonifas* を読み，*Thérèse Desqueyroux* 執筆にあたって，多少とも影響を受けたことは，Henri de Régrier あて書簡の，引用した一節から推測し得る。

ところで，*La Bonifas* の主人公 Bonifas とはどういう女性かといえば，〈男性と隣りあわせただけ〉でも，あるいは〈男性の声を耳にしただけでも〉，嫌悪感を覚えずにはいられない女性で[15)]，〈男性に関する限り，卑しくも笑うべき特質[16)]〉しか認めることができない人間である。*Conscience, instinct divin* の女主人公に見られるのと同じ男性嫌悪が，すでに *La Bonifas* に描かれている。のみならず，*La Bonifas* の女主人公は，あらがいがたく女性に心をひかれ，寄宿学校では，女友達ゆえに苦しみ，また女友達を苦しめる。ボニファスのこうした苦しみが，同性愛的感情ゆえのものであることはもちろんで，女生徒どうしのそうした感情生活が，この小説には詳しく描かれている。*Conscience, instinct divin* の女主人公もまた，修道院附属の寄宿学校で，同様な感情生活を体験したものと思われる。さきに引用した一節で，主人公が女友達を苦しめ，かつ女友達によって苦しめられるという記述は，草稿 I，及び草稿 II で消滅してしまうのであるが，奇妙なことに，最終稿ではふたたび出現している。ただし，その際，表現にかなりの修正が加えられた。

Pure, je l'étais : un ange, oui! Mais un ange plein de passions. Quoi que prétendissent mes maîtresses, je souffrais, je faisais souffrir. Je

jouissais du mal que je causais et de celui qui me venait de mes amies ; pure souffrance qu'aucun remords n'altérait (...)[17]

Jacques Petit は，この箇所について注記し，この曖昧な記述は，テレーズの性格を示すもので，後にテレーズが義妹の Anne de La Trave を苦しめるのも同じ性格によるものだと述べている[18]。じっさい，最終稿の文脈においてこの一節は，テレーズの性格上の邪悪さを示すものとしか考えられない。寄宿学校時代にすでにうかがわれた邪悪さゆえに，テレーズは Anne de La Trave と恋人との仲を裂き，さらには夫にたいする毒殺未遂にまでいたったのだ，と最終稿 *Thérèse Desqueyroux* の読者は理解せざるを得ないのである。しかし未定稿 *Conscience, instinct divin* にまでさかのぼってテキストを検討するならば，この記述はたんに女主人公の同性愛的傾向を示すにすぎないことが理解される。

さきに述べたように，*Conscience, instinct divin* の草稿と，同作の刊行されたテキストのあいだには若干の相違点がみいだされ，作者がこの未定稿を発表するにあたって，一応の見直し作業を行ったことが理解されるのであるが，これらの variantes もまた，*Conscience, instinct divin* の主人公が秘められた特殊な情念の持主であったことを示している。*Conscience, instinct divin* の刊行されたテキストにおいて，女主人公は神の御前で報告しなければならないことがあると述べたのち，次のように語る。lui とは神のことである。

J'ai foi en lui comme je crois au feu qui brûle ; et aussi comme un affamé croit à sa faim ; comme un être sali croit à l'eau qui lave.[19]

この同じ箇所が草稿では，〈J'ai foi en lui comme je crois au feu qui <u>*me*</u> brûle (...)〉[20]（下線は筆者による）となっている。〈me〉という補語人称代名詞の存在は，草稿において，燃える火とは，たんなる物的な火では

なく，燃えさかる情念の火の意味であったことを示している。

また，主人公が女友達の Raymonde とともに，アルジュルーズで夏の休暇を過ごす折り，移り変る雲の形をさまさまなものに見立てて遊ぶ情景がある。

> C'était notre plaisir de regarder glisser et se déformer les nuages, et avant que j'eusse eu le temps de distinguer la femme ailée que Raymonde voyait dans le ciel, ce n'était déjà plus, me disait-elle, qu'une bête étendue.[21)]

表現を変えて最終稿にまで残るこの一節は，最終稿ではもちろんのこと，*Conscience, instinct divin* の刊行されたテキストにおいても，なんでもない無邪気な情景を表わしているかに見える。しかし，*Conscience, instinct divin* の草稿において，この箇所は，見方によっては，かならずしも無邪気とばかり言えない要素を含んでいる。なぜなら草稿には，《C'était notre plaisir de regarder *serrées le plus près possibles l'une de l'autre*(...)[22)]》（下線は筆者）とあるからである。

ささいな細部にすぎないとはいえ，草稿にあって，その後抹消されたこれら二つの variantes は，*Conscience, instinct divin* の主人公の情念や，女友達 Raymonde にたいしていだかれた特殊な感情を暗示している。上記二つの variantes は，Jacques Petit によって作成された Pléiade 版の variantes 中には見いだされない。

ところで，わずか12枚の草稿が書かれただけで，早くも *Conscience, instinct divin* の執筆が中断されたのはなぜだろうか。思うに神父にたいしてなされる告解という小説形式が，作者にとって望ましいものとは思われなくなったからであろう。宗教的行為としての告解において，罪の率直簡明な告白が要求されることは言うまでもない。虚構の物語においても，このような原則に反することは許されず，作者は，遅かれ早かれ，女主人公

に明確な言語によってその罪の全容を告白させざるを得なかったはずである。女主人公は，心のあらゆる秘密を白日のもとにさらけ出さざるを得ず，特異な性的傾向をも，そのすべての心理的結果とともに告白せざるを得なかったであろう。しかし，それこそ，*Conscience, instinct divin* の作者が，作品中に記述するのにためらわざるを得ない事であった。そのなによりの証拠は，主人公が肝心の問題に近づくたびごとに，〈まだその時は来ていない〉(il n'est pas temps encore) [23]とか，〈話の筋からはずれてしまう〉(Je m'égare) [24]などと言わせ，告白を中断せしめていることである。主人公が同性にたいする特殊な感情を，赤裸に告白することを，おそらく作者は望んでおらず，むしろ一切を謎めいた曖昧さのうちにとどめておくことを好んだのであろう。じじつ，草稿Ⅰでは，第3人称の物語を小説形式として採用し，詩的なイメージを多用することで，作品の真の主題を隠蔽することに作者はある程度成功している。ただし，そのような形によっても，真の主題は現われざるを得ず，草稿Ⅱ以降において，作者は主題の変更を余儀なくされるのである。

注

1） *Mémoires intérieurs,* Pléiade, p. 558.

2） Charles du Bos : *Journal,* Corrêa, 1949, t. 3, p. 128.

3） la Bibliothèque littérare Jacques Doucet, MRC 21.

4） Conscience! conscience! instinct divin, immortelle et céleste voix ; guide assuré d'un être ignorant et borné, mais intelligent et libre ; juge infaillible du bien et du mal, qui rends l'homme semblable à Dieu, c'est toi qui fais l'excellence de sa nature et la moralité de ses actions ; sans toi je ne sens rien en moi qui m'élève au-dessus des bêtes, que le triste privilège de m'égarer d'erreurs en erreurs à l'aide d'un entendement sans règle et d'une raison sans principe. (Rousseau : *Émile ou de l'éducation,* Garnier-Flammarion, livre IV, p. 378.)

5） *Conscience, instinct divin,* Mauriac *: Œuvres romanesques et théâtrales,* Pléiade, t. II, p. 8.

6） *Thérèse Desqueyroux, ibid.,* p. 26.

7） 「芸文研究」第59号，1991年3月。

8) *Conscience, instinct divin, op. cit.*, p. 8.
9) *Ibid.*, p. 13.
10) *Ibid.*, p. 13.
11) *Ibid.*, p. 13.
12) *Ibid.*, p. 6.
13) *Ibid.*, p. 5.
14) Mauriac : *Nouvelles lettres d'une vie,* Grasset, 1989, p. 113.
15) Jacques de Lacretelle : *La Bonifas,* Gallimard, 1925, p. 71.
16) *Ibid.*, p. 221.
17) *Thérèse Desqueyroux, op. cit.*, p. 29.
18) *Œuvres romanesques et theatrales,* t. II, *op. cit.*, p. 943.
19) *Conscience, instinct divin, op. cit.*, p. 5.
20) MRC 21, fol. 2.
21) *Conscience, instinct divin, op. cit.*, p. 10.
22) MRC 21, fol. 7.
23) *Conscience, instinct divin, op. cit.*, p. 13.
24) *Ibid.*, p. 11.